

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

釜 丸 祥

はじめに

『むぐらの宿』^①とは、いわゆる中世王朝物語の一作品である。文永八（一二七二）年成立の『風葉和歌集』にその名が見えることから、それ以前の成立であるとは窺えるが、それ以上、はっきりしたことはわからない。また、現存伝本が二本に限られていることに加え、程度の差はあるものの、両本とも前半部を大きく欠いているために作品世界を考究しがたい。実際、『むぐらの宿』を中心に取上げた論文は、現状、辛島正雄氏^②、中島泰貴氏^③、大倉比呂志氏^④によるほぼ三つの論考に限られており、研究状況は芳しいと言えない。このように、様々な面で日の当たらない『むぐらの宿』ではあるが、本作品は「そらじに」というやや珍しいことばを三例有しており注目される。これについては、既に常磐井和子氏に言及がある^⑤。

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

氏は、『むぐらの宿』の成立以前の作品に見られる「そらじに」の五例（『今昔物語集』の本文二例と表題一例、『無名草子』の『夜の寢覚』末尾欠巻部言及箇所^⑥の二例）及びその類例を踏まえ、

「むぐら」に言う「そらじに」は、度々おこる病的な発作で、感情の起伏にも関係し、本人も周囲も又かということ^⑦で深刻ではない。感情の動きの影響が大きいらしく、時には意図的のようにもなる。今でいうヒステリーの発作の様なものらしい

（二〇頁）

とし、また『夜の寢覚』末尾欠巻部の「そらじに」にも触れ、

寢覚物語の「そらじに」も、恐らくは「むぐら」のそれと同様なものだったのであろう。ただし、それはいわば失神で、勿論意図的にしたわけではなかったが、たまく／＼それを手段に有利な結果が得られたという程度のことではなかったろうか。その

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

二

「そらじに」を意図的にあくどい手段として使うようになったのが、「むぐら」の「そらじに」の有様かと思われる。

(一〇頁)

と指摘している。詳細は後で述べるが、常磐井氏の論文以降に発表された『夜の寝覚』の研究成果を踏まえるならば、『夜の寝覚』の「そらじに」を「いわば失神で、勿論意図的にしたわけではなかった」とするのは適切ではないものの、それでも『むぐらの宿』が「そらじに」を「あくどい手段として」使っていると指摘した点は首肯できよう。

しかしながら、『むぐらの宿』の「そらじに」が登場人物によって「意図的」になされたかどうかという点や「そらじに」を「度々おこる病的な発作」「ヒステリーの発作の様なもの」とする点については稿者と意見を異にするし、また氏の指摘よりも「そらじに」は物語の根幹にかかわる重要なことばであるように思われる。そこで、本稿では、『むぐらの宿』における「そらじに」に着目し、常磐井氏の指摘を一部修正しつつ、また氏の想定以上に、「そらじに」が物語世界において重要な機能を持っていることを論じていく。

なお、本稿における『むぐらの宿』の本文は、全て中西健治 常磐井和子校訂・訳注『中世王朝物語全集15 風に紅葉 むぐら』(笠間書院 二〇〇一年)より引用した。また、引用中の傍線部そ

の他の処理は、全て稿者が私に施したものである。

一 『むぐらの宿』以前の「そらじに」について

「はじめに」で触れたように、常磐井和子氏の指摘通り『むぐらの宿』以前において、「そらじに」は五例確認される。以下、用例を時代順に挙げる。

〔今昔物語集〕^⑦ 三例(内、表題一例)〈

① 此レヲ思フニ、構ヘテ盗マム事ハ為ル者モ有ナム。何デカ然カ

虚死^{ホトケシ}ハシテ不動ズシテ久クハ有ラム。亦何デカ涙ハ心ニ任セテ

泛サム。実ニ見ケルニ、由無キ者モ皆悲カリケル事也。

卷二九「撰津国来小屋寺盗鐘語第十七」 (三四五頁)

② 袴垂於関山虚死^{ホトケシ}殺人語第十九 卷二九 (三四八頁)

③ 今昔、袴垂ト云フ盗人有ケリ。盗ヲ以テ業トシテ有ケレバ被捕テ獄ニ被禁タリケルガ、大赦ニ被掃テ出ニケルガ、可立寄キ所モ無ク、可為キ方モ不思議リケレバ、関山ニ行テ、露、身ニ懸タル物モ無ク裸ニテ、虚死^{ホトケシ}ヲシテ路辺ニ臥セリケレバ、

(三四八頁)

〔無名草子〕^⑧ 二例〈

④ 中宮の御産の御祈りの仏の多きこそ、まことしからね。また、何事よりも、権大納言の即身成仏こそ、返す返す口惜しけれ。

法師になりたるあはれ、皆醒めて、『寢覚』の中の君のそら死にも劣らぬほどの口惜しさ。(二五〇頁)

⑤ すべて、今の世の物語は、古き帝にて、『狭衣』の天の乙女、

『寢覚』のうちしきなども、今少しことごとしく、いちはやきさまにしなしたるほどに、いとまことしからず、おびただしきふしぶしぞはべる。(二五七頁)

まず『今昔物語集』の三例であるが、用例①は西国から来た法師と男二人が、死穢を巧みに利用して、鐘を盗むために「虚死」をしたというものである。用例②、③は盗賊の袴垂が「虚死」をするという例で、この後、近づいた武者を殺して衣類や武器を奪う。『今昔物語集』の例を見る限り、「そらじに」とは何らかの目的を持って、意図的に死を装うことだと考えられる。

続いて『無名草子』の二例を見ていく。これらは、どちらも『夜の寢覚』末尾欠巻部において、中の君が「そらじに」をしたことに関する記述である。用例④は、現在は散逸したとされる古本『海人の荇藻』に関する記事である。そこで描かれる「権大納言の即身成仏」と同様に「口惜し」の例として、『寢覚』の中の君のそら死が引き合いに出されている。用例⑤は、「今の世の物語」は「いとまことしからず、おびただしきふしぶし」があるという文脈の中に登場する。本文には「『寢覚』のうちしき」とあり「そらじに」で

はないが、『新編日本古典文学全集』の頭注は「うちしき」は「そらしに」の誤写か(二五八頁)としている。「そ」「ら」「に」はそれぞれ、「そ(曾)」「う(宇)」「ら(良)」「ち(知)」「に(尔)」「き(支)」のように誤写される可能性があり、頭注の想定は妥当であると判断されるため、これに従う。

『無名草子』に記された『夜の寢覚』の「そらじに」については、大槻福子氏が『無名草子』の「幸、幸ひもなげに隠れあたる」(二三三頁)や『夜寢覚拔書』の「いかでゆめ□うちにも、□くてあるぞとしらせてしがな」(二九四頁)^⑨等の記述を根拠に、『無名草子』にある「死にかへる」(二三三頁)と併せる形で、明快に解いている^⑩。氏の主張を要約すると次のようになる。

(1) 従来、『無名草子』に見える「死にかへる」及び「そらじに」がどちらも秘法秘薬による死者蘇生に関わるものとされてきたが、誤りである。

(2) 「死にかへる」とは、冷泉院に迫られた中の君が仮死状態に陥ったことであり、一方、「そらじに」とは、中の君が冷泉院を恐れたために、自らの死を偽り、世間から隠れ住んだことである。いずれも従うべき意見であろう。そうすると、『無名草子』の二例も、先の『今昔物語集』の三例と同様に、ある目的を持ったうえで、死を意図的に装うことだと纏めることができよう。

二 内大臣の上について

前節において、『むぐらの宿』以前の「そらじに」を分析してきた。これを踏まえ、『むぐらの宿』の「そらじに」について見ていきたいのであるが、その前に、『むぐらの宿』において「そらじに」を行なった内大臣の上なる人物について確認しておきたい。というのも、内大臣の上の人物造型が、「そらじに」の機能と密接に関わってくるためである。

内大臣の上とは、物語の中心人物の一人である大将の継母であり、また大将と婚姻関係にあった、右大臣の継子である女君（ただし母と死別し、現在は継母がいる）に虐めを行なっていたという、いわば物語の悪役である。

では、なぜ内大臣の上が女君を虐めていたかと言えば、継子の大将が女君の許に通うことで、自分への訪れがなくなってしまうことが耐えられないからである。つまり、内大臣の上は大将に熱烈な愛情を向けており、そのために大将との生活を邪魔する女君を憎み、虐げているのである。

内大臣の上の、そうした苛烈な愛情が端的に読み取れる場面として、次の箇所が挙げられる。物語末尾において、大将の死を知った内大臣の上が悲嘆にくれる場面である。

母上（稿者注・内大臣の上）は聞き給ひて、「一日おはしたりしは、今一度見んと思しておはしたりしものを、よしなき事をして、やがて絶え入り給ひぬれば、姫君の御前も何くれと思したりつれども、大将殿のかなしさに、我は次の事になりぬるにや」と心憂し。

（二〇四頁）

ここでいう「よしなき事」とは、前に大将が自分のもとを訪れた際に、大将に対して心無い対応をしてしまったことを指している。内大臣の上の、大将に対する愛情は「我世にありて何にかはせん」と泣き騒ぎ、気絶するぐらいには深いものである。さらにいえば、その様子を見た、内大臣の上の娘（もしくは養子^①）である姫君の御前（宰相姫君）にしても、「大将殿のかなしさに、我は次の事になりぬるにやと心憂し」と、大将への愛情の深さと自分へのそれとの格差に「心憂く思うほどである。なお、この後、大将を亡くした悲しみのために内大臣の上は死んでしまうのであり、そうしたところからも尋常でない大将への愛情が知られる。

それほどまでに大将を愛しているのだから、自分から大将を奪おうとする女君が憎いというはある種自然ともいえる。実際、女君が失踪したことを知った折は、「まことに人は失せにけるにや」と嬉しく思す」（一七三頁）というように、歡喜するのである。

なお、内大臣の上については既に辛島正雄氏^②、大倉比呂志氏^③に言及がある。

辛島正雄氏は、物語の定石に則るのであれば継子を虐めるはずであるのに逆に継子である大将を愛していること、女君の継母の方はほとんど登場しないことなどを踏まえて、

やや無責任な物言いになることを許されるならば、現存本もつとも異彩を放つ人物こそ、ほかならぬこの継母であるといえよう。
(三二六頁)

と評している。
次いで、大倉比呂志氏は、先の辛島氏の主張を具体的に分析する形で、内大臣の上の機能について論じている。

継母（稿者注・内大臣の上）の造型には『夜の寢覚』の大皇宮の存在が基盤にあると考えられるわけだが、継母の大将と女君への忌避（稿者注・「継母の大将への愛情と女君への忌避」カ）が原因で、帝が女君を取りこめる結果を生じ、それが大将の死を招来したというように、継母の行動が話筋を展開させているのだ。そのような意味において、『夜の寢覚』を**変奏**しているところに、『むぐら』の**新企画の意味があるのだ**。すなわち、継母が話筋を展開させていく黒幕であり、いわば彼女は隠れた主人公でもあったのだ。
(四三三頁)

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

内大臣の上の一連の行動が物語を動かしていくことを指摘する点、内大臣の上の人物造型に『夜の寢覚』の大皇の宮を読み取っている点において示唆的である。しかしながら、辛島氏を含め、大倉氏も内大臣の上を分析する際に「そらじに」を特段重視していないことには不足を感じざるを得ない。そのため、本稿において改めて「そらじに」へと繋がる形で、内大臣の上の人物造型について把握していきたい。

まず、作中において、内大臣の上が作中人物や語り手からどのような存在として見られているかについて、形容表現を手掛かりに見ていきたい。次の図は、それについて稿者が調査し、用例数順に一覧にしたものである。なお、集計に際して、本作品には索引等が存在しないため、稿者が私に調査した。また、形容表現の品詞（例えば「ゲナリ」が接尾することで形容動詞化したもの等）については、本稿の結論に関わらないと判断したため図には示さなかった。

一覧すると、内大臣の上で使用された形容表現は概してマイナスの表現である。これらは「けしからず」を除いて、打消の表現を伴わない。また、「けしからず」についても、「すばらしい」の意ではなく、全て「異常である」等のマイナスの意で使用されている。そのため、内大臣の上は作中において否定的な人物として見られるということが出来る。

形容表現	用例数	誰からの形容表現か
おそろし	6	大将 (3) 西の御方 (2) 帝 (1)
うとまし	4	大将 (3) 内大臣 (1)
けしからず	3	大将 (2) 東宮 (1)
むつかし	3	大将 (3)
あし	2	よその人 (1) 語り手 (1)
うし	2	女君 (2)
よしなし	2	大将 (1) 語り手 (1)
こころうし	1	女君 (1)
ものむつかし	1	大将 (1)
計		24

は彼女が、内大臣の上に嫌気がさした内大臣と関係を持つようになった際、内大臣の上を恐れたためである。

内大臣の上への形容表現が最も多い人物は継子の大将であり、総数は一三例を数え、全体二四例のうち半分以上を占めている。これは、両者が家族関係にあることはもちろん、先に述べたように、内大臣の上が大将をひどく愛していること、大将と婚姻関係にある女君を虐めていたことなどが関係していよう。それこそ「むつかし」

使用されている語として最も多いのは「おそろし」であり、これは女君を虐げていたことなど、内大臣の上の好ましくない言動によるものといえよう。なお、西の御方という右大臣の娘（ただし女君とは母親が別）からも「おそろし」と使用されているが、これ

という語は大将の視点からしか使用されておらず、また類義語の「うとまし」^⑮を使用しているのも大将が最多であることを踏まえ、と、大将の行動を規制しようとする内大臣の上の言動への、大将の想いが表れている。

また、「うし」や「こころうし」といった「うし」系統の語は、女君の視点からしか使用されていないことも示唆的である。作中において「うし」系統の語は、内大臣の上関連に限られるというわけではなく、物語の様々な事柄に対する女君の心情を語る語として頻用されている。しかしながら、他の人物の視点からは「うし」系統の語が使われないのに、女君の視点からのみ使われるというのは、女君が内大臣の上から虐げられていたことによるものだと考えられ、その意味で、「うし」系統の語には両者の関係性が端的に表れている。

さらに注目すべきこととして、「あし」「けしからず」「むつかし」「ものむつかし」^⑯という表現は、作中において内大臣の上に対してしか用いられない。また、内大臣の上とその周辺に限定されて使われる語に「うとまし」がある。「うとまし」は内大臣の上に使われる以外、宰相姫君にも一例使用されているが、宰相姫君は内大臣の上の娘（もしくは養子）であり、内大臣の上同様に「もの恐ろし」（二六七頁）と否定的に描かれる人物のため、「うとまし」は内大臣

の上及びその周辺にしか用いられないことばであるといえる。内大臣の上を悪役として描くため、ことばが選びとられているといえよう。

ここまで、内大臣の上が作中人物や語り手から如何なる存在として見られているかについて、形容表現から確認してきた。それでは次に、内大臣の上の言動にしか関わらない語という観点から、内大臣の上の人物造型に迫っていききたい。内大臣の上の言動に限定されて使用される語としては、先に示した「あし」「けしからず」「むつかし」「ものむつかし」以外に、稿者の調査の限り「にくむ」関連語（「にくし」「にくげなり」を含め計八例）や「のろひ」関連語（「のろふ」「のろひころす」含め計三例）がある。これらはいずれも女君との関係性において登場することばであり、その理由として、内大臣の上は女君に結果として大将を奪われるため、女君を敵視しているということが考えられよう。また、興味深いことに、「にくむ」関連語や「のろひ」関連語は、女君の継母という、内大臣の上同様に女君を心よく思っていない人物の言動には使われない。その代わりに、女君の継母の言動には「(女君を)恨めしく覚え給ふ」(二〇九頁) というように「うらむ」関連語が使用される一方、内大臣の上には「うらめし」などの「うらむ」関連語が全く使われない。どちらも継母であり、女君のことをよく思わない人物であるが、

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

両者には使われることばに差が見られるのである。このように、『むぐらの宿』は内大臣の上の言動に特定の表現を使用することによって、その悪役的な人物像を印象的に描き出しているのであった。以上の分析より、内大臣の上とは作中において常に否定的に語られる、まさに悪役的な人物であった。そうした内大臣の上の人物造型の結晶が「そらじに」なのであり、物語を劇的に展開させていくのである。

三 『むぐらの宿』の「そらじに」の機能について

本節では、前節までの検討を踏まえ、『むぐらの宿』の「そらじに」を見ていく。惜しいことに、「そらじに」自体は描かれていないのであるが、「はじめに」でも述べたように、本作品において「そらじに」は三例確認される。

一、二例目は女君の姉である御息所の御局にて、女房たちが内大臣の上の「そらじに」について噂している場面に見られる。

「内大臣殿の上は、大将殿を呼びとり給はんとて、空死をし給ふなる」「あまりあきれて大将殿は病づきて、物などおほかた見入れさせ給はざんなり」「あないとほし、いかに心苦しく思し召すらん」「ざりとていづくにかおはしまさんと思し召す」と言へば、(中略)「そよ、御心のおろかなるとも見え給はぬに、

母御前の制せさせ給ひて、空死などせさせ給ふなれば、よしなく思し召すにこそ」など言ふを、(女君は)少し起き上がりて、「いな、この沙汰なせそ」と制する気色、気配のうつくしき限りなし。(二四七頁)

これによれば、内大臣の上の「そらじに」は大将を「呼びと」り、女君のもとへ行くのを「制す」ためのものであったことが窺える。前節において、内大臣の上の大将への想いの大きさを確認したが、この「そらじに」もそうした愛情によって行なわれたとみるべきであろう。また、こうした大将の行動を規制する内大臣の上の在り方は、前節で触れたように大将から「うとまし」や「むつかし」と思われるものであった。それは、人々が大将に同情的に語っているところからも翻って裏付けられる。そうすると「そらじに」とは、内大臣の上の大将への苛烈な愛情の表れなのであり、また彼女の「うとまし」さや「むつかし」さの発露であるともいえよう。また、「そらじに」によって大将が内大臣の上の許に留まらねばならなかったのだから、「そらじに」は大将と女君とを引き離すという物語上の機能を持っていることも押さえておきたい。

三例目は、先ほどの女房たちの会話を聞いていた帝が、女君の元に侵入する場面に確認される。

(女君は)傍らに添ひ臥させ給ふに、うちとけても寝られ給は

ねば、「こはいかに、大将殿の聞きつけておはしたるにや」と、あさましく思すに、あらぬ気色なれば心憂くて、ただ泣きに泣き給ふに、(帝は)「あなうたて、大将の母上のあたりに制すれば、憚りて参らぬを、とぶらひに参りたるぞかし。この上の空死嬉しうもかく思ふ事は叶ひけるものぞ」とて逃るべくもなく、ひたうるび給ふ気色、「内裏の御声にや」と思ひなせど、鬼などに取り籠められたらんやうに覚えて、わななかる

(二四八頁)

二つ目の場面からは、まず先ほどと同様に、「そらじに」が大将を上内大臣の上の「あたりに制す」るためのものであったことがわかる。さらに、帝自身の「この上の空死嬉しうもかく思ふ事は叶ひけるものぞ」という発言にあるように、「そらじに」が帝と女君とを逢わせる契機となったことが読み取れる。つまり、「そらじに」は大将と女君とを引き裂き、帝と女君とを引き逢わせるといふ物語上の機能を持っているといえるのである。

以上『むぐらの宿』の「そらじに」三例を見てきたわけであるが、それ以前の作品のそれと比べてどのような共通点や独自性があるかについて見ておきたい。

まず、先行する五例全てと共通する点として、「そらじに」は意図的に行われるものだということが挙げられよう。無論、先ほど挙

げた二つの場面において内大臣の上自身の発言はないため、内大臣の上が大将を手許に留めるために意図的に「そらじに」を行なったのだと、女房や帝から誤解されている可能性もなくはない。しかしながら、「そらじに」自体の例ではないが、大将を留めようと内大臣の上が脅迫的な発言を行なう例は確認することができる。

「例の事起こりて死に入りたりつれども、かしこく生き出でてこそ。さても（大将は）今は行かじとあれど、まず長楽寺へぞおはしける。いかにも我を呪ひ殺させて心ゆき給はんずる」など（内大臣の上は）例のむつかしくののしり給へば、

（二六六頁）

以上の例から見ても、内大臣の上の「そらじに」は意図的なものであるとみてよい。

「はじめに」で挙げたように、常盤井氏は「感情の動きの影響が大きいらしく、時には意図的のようにもなる」と曖昧な書き方をしているが、「そらじに」は「意図的」なものだとすべきであろう。

また、常盤井氏は「そらじに」を「度々おこる病的な発作」「ヒステリーの発作の様なもの」としていたが、先行する五例の「そらじに」が意図的になされたものであることを踏まえると、「病」として捉えるべきではないように思われる。確かに作中において、内大臣の上が「病」を患っているとする記述は三例見られる。一例目

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

は内大臣の上と大将、二例目は帝と大将、三例目は東宮と大将の会話である。

（大将は）「内裏より召す」と言ひて出で給ふを、（内大臣の上は）「かかるついでにも、かしこへはなおはしそ。わびしく、病みもやらでおこりおこりするを、あやしきものなど問はずれば、人の呪ひと言ふなれば、ただかしこに呪わるるなり。死にて待るともかくと知らせ給ふな」など、なほ制し給へば

（二五六頁）

（帝は）「いかにさはいつとなくあるにかあるらん。長病にはとかや言ふなるものを」と笑はせ給へば、（大将は）「げにさ覚え侍るなり」と申し給ふ。

（二六〇頁）

（東宮は）「何病にておはするぞ。不憫の事かな」と仰せらるるにつきても、「いかに思し出づらん」と、御心中恥づかし。

（大将は）「今日も絶え入るとなん申し侍りつれども、あまりの事にてまづこれへ参りたくて侍る」と申し給へば、「あはれ世のたとひの事にこそ」とてうち笑ませ給ふ。

（二六一頁）

しかしながら、一例目は内大臣の上が大将を引き止めるために「病」を自称しており、また二例目と三例目は「笑はせ給へば」「うち笑ませ給ふ」とあるように、帝や東宮は内大臣の上の「病」を仮病と考え、それにふりまわされる大将に同情しつつ、一方で大将を

からかっているのであって、そうすると内大臣の上の「そらじに」を「病的な発作」や「ヒステリー」であると捉えるのは正確ではないように思われる。このように考えると、やはり「そらじに」は意図的なものと結論付けるべきであろう。

ここまで、「そらじに」の共通点を確認したが、それでは『むぐらの宿』の「そらじに」の独自性は何かといえ第一に大将と女君とを隔て、女君と帝とを結び合わせるという機能を持っている点であろう。こうした機能は他の例にはなく、『むぐらの宿』という物語を大きく展開させる際に重要な要素となっている。

また、第二の独自機能として、内大臣の上に異質さを付与することで悪役たらしめることが挙げられる。同時代の物語作品において、内大臣の上と同様に男君を自分側に通わせようと謀を行なう人物たちと内大臣の上とを比較すると、動機において非常に異質なのであり、それが内大臣の上の造型に深く関わっているのである。

内大臣の上に似た人物として、内大臣の上に大きな影響を与えたとされる『夜の寝覚』の大皇の宮、『あきざり』の左大臣の北の方や『しぐれ』の左大将の北の方（大東急記念文庫蔵永正一七年本では右大臣の北の方）が挙げられる。自分の娘の許に通わせるために、『夜の寝覚』の大皇の宮もいわゆる帝闖入事件や偽生霊事件と呼ばれる事件を引き起こし、『あきざり』の左大臣の北の方は男君に呪

詛をかけ、『しぐれ』の左大将の北の方は祈禱を行なう。こうした、男君を自分の娘に通わせるために暗躍するという意味での類例の存在を考えると、「そらじに」という方法をとったことが特徴的とは言え、内大臣の上の振る舞いは飽くまで当時の悪役的な存在としては類型的なかと思われてくる。

しかしながら、先にも述べたように内大臣の上は暗躍の動機において非常に特異な人物なのである。『むぐらの宿』において、内大臣の上が「そらじに」を行なったのは、愛する継子である大将を女君の許に通わせず、手許に留めるためであった。一方、先に挙げた『夜の寝覚』の大皇の宮、『あきざり』の左大臣の北の方や『しぐれ』の左大将の北の方は、男君を自分の娘へ通わせるという政治的な問題のために権謀術数を行なうのである。つまり、『むぐらの宿』の内大臣の上は、その他の物語とは異なり、家のためではなく、自らの愛情のために暗躍するのである。

『むぐらの宿』の女君は右大臣家の姫君であり、大将が婚姻関係を結ぶ相手として相応しい。無論、女君は継子ではあるが、内大臣から「宮腹にも劣り給はぬ」（一九四頁）と評されているし、同腹の姉である御息所は東宮より寵愛を受けている。栄華の獲得を目指すのであれば、大将が女君の元へ通うことを邪魔する理由はないはずである。このように、内大臣の上の「そらじに」は非常に違和感

を覚えるものであり、内大臣の上は実に異質な存在なのである。

『むぐらの宿』は、内大臣の上をそのような異質な人物として造型することで、物語の悪役を生み出そうとしたのだと考えられる。先に確認したように、自分の愛情のために「そらじに」をして継子を手許に留めようとする人物は物語文学としては異質であるから、当時の読者は内大臣の上に共感し得ないであろう。内大臣の上はそのような異質な人物と設定されることで、悪役として描き出されているのである。さらに、第二節で見たように、内大臣の上が他者からマイナスの表現で語られる人物として造型されていたことも考え合わせると、内大臣の上は徹底して悪役として語られている。このように、違和を抱かざるを得ない人物、つまり内大臣の上なる悪役を生み出すこと、それこそが『むぐらの宿』の「そらじに」が持つ独自の機能なのである。

四 『むぐらの宿』の結末と「そらじに」について

前節では、『むぐらの宿』における「そらじに」の機能を論じた。本節では、それを踏まえ、『むぐらの宿』の結末について確認していきたい。

『むぐらの宿』終末部において、内大臣家は数々の悲劇に見舞われ、更にその責任は内大臣の上に求められていく。

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

姫君と言へば、世にあるかひもなく、母上よしなき名を流してきて止みぬ。
(二〇三頁)

母上もその思ひにや失せ給ひにしかば、東宮のさきの女御かたがた憂しと思しとりて、母の御忌に忍びて様変へ給ひにけり。

「母の御心の悪さに、公達もかくなり給ひぬ」とよその人は沙汰しけり。
(二〇七頁)

我が先の女御殿の尼になり給へるも、いかにも大事の人にこそ思はましに、母の心のけしからずさに、御子たちもみないたづらになりつるぞかし。果ては我が身も亡くなり給ひぬ。宰相の姫君と言ひしは、かたがた心憂くのみ思して、尼姫君につきてぞおはしける。
(二二二頁)

内大臣の上の娘である姫君は「母上よしなき名」や「母の御心の悪さ」によって、東宮から愛想を尽かされ、出家することとなった、と語られる。さらには、「母の心のけしからずさ」により、大将を含めて「御子たちもみないたづらにな」り、「果ては我が身も亡くな」ってしまつたというように内大臣の上自身の死までも引き起こされたとする。内大臣自身は、

よき人めかしかりつる子は、かく亡せぬれば、「我が身の宿世の悪さにかくなりぬ」と思すに、おほかた世にもありまじらひて、心憂しと思したり。
(二〇三頁)

として、自分に原因があるとしているが、しかし、語り手や世間は、その素因を内大臣の上に収束させる。内大臣の上が自分の愛情ゆえに「そらじに」をするような人物であったために悲劇が招来されたのだと、物語は語ろうとしているのである。

また、興味深いことに、数々の悲劇に見舞われた内大臣家ではあるが、この後結果的に栄華を得るに至っているのである。というのも、内大臣は摂政と関白を兼ねているし、大将と女君の間に生まれた姫君は、東宮と御息所の中に生まれた若君に嫁いでおり、将来的な栄華が期待されている。

思うに、これは自分の愛情のために「そらじに」を行なうような内大臣の上という悪役が排除されたことで、内大臣家は正常化したということ語ろうとしているのではないか。無論、物語の大枠としては、女君が栄華を極めるといことが語られているのではあるが、内大臣の上という悪役が死ぬことで内大臣家が栄華を得ていくという側面が『むぐらの宿』にあることは間違いない、そうした排除されるべき悪役を描くに際して「そらじに」が機能しているといことができればよい。

おわりに

本稿では、『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

分析した結果、次の成果を得た。

I 『むぐらの宿』の「そらじに」は、大将を我が許に留めようとする過剰な愛情のために内大臣の上が意図的に起こしたものであり、彼女の「うとましく・むつかし」い性格の象徴である。

II 『むぐらの宿』の「そらじに」は、大将と女君とを引き離し、帝と女君とを引き逢わせるとい機能を持つ。

III 『むぐらの宿』の「そらじに」は、内大臣の上で使用される表裏と併せて、内大臣の上という悪役を生み出す方法として機能している。

IV 『むぐらの宿』という物語は、内大臣の上という悪役が死ぬことで、内大臣家が栄華を得ていくという側面を持っており、そのような排斥されるべき悪役を造型するにあたって「そらじに」が機能している。

ことばに着目する研究は、細かな指摘に終始しかねない危険性を常に孕んでいる。特に「そらじに」のような用例数の少ないことはを取り上げるといのは徒労に終わる可能性が高い。しかし、本稿で試みたように、物語の展開という大きな問題にまで繋がっていくことも充分あり得ることである。ことばを手掛かりとしつつ、物語の構造までまなざすこと、そうした姿勢こそが、これからの中世の

王朝物語研究において必要であるように思われる。

注

- ① 本物語には『むぐら』と『むぐらの宿』という二つの呼び方がある。本稿では、中島泰貴氏の「『律の宿』題号考」(『中世王朝物語の引用と話型』ひつじ書房 二〇一〇年)【初出】「『律の宿』題号考」『岐阜工業高等専門学校紀要』二七号 二〇〇二年三月)の研究成果を踏まえ、『むぐらの宿』の方を用いた。詳細は当該論文を参照されたい。
- ② 辛島正雄「『むぐらの宿』について——秋香台文庫本出現に寄せて」(『中世王朝物語史論 下巻』笠間書院 二〇〇一年)【初出】「徳島大学教養学部紀要(人文・社会科学)」二二巻 一九八七年三月)
- ③ 注①の中島氏論文。
- ④ 大倉比呂志「十五 むぐら」(『物語文学集攷——平安後期から中世へ——』新典社 二〇一三年)【初出】「『むぐら』論」『学苑』七四九号 二〇〇三年一月)
- ⑤ 常盤井和子「散佚物語『むぐら』の一本」(『二巻本むぐら 秋香台文庫蔵』笠間書院 一九八四年)【初出】『学習院大学国語国文学会誌』二二号 一九七九年三月)
- ⑥ 『むぐらの宿』からやや時代は下るものの、一四世紀頃の成立とされる『袋法師絵巻』において「そらじに」の例を見出すことができた。引用は、吉橋さやか「新出本『袋法師絵巻』について」『立教大学日本学研究所年報』二二号 二〇〇二年八月)による。

法師今はよはり果命有ての事よと思ひ空死し侍れはいつれもうち驚きよその聞へも大かたのそらおそろしくやおほしけむ(二〇頁)

ただし、吉橋氏の論によれば、本場面は『袋法師絵巻』成立当初には存

『むぐらの宿』における「そらじに」の機能について

在しなかつた可能性があり、同時代の例として積極的に認めがたいので、注として参考程度に記しておく。

- ⑦ 馬淵和夫 国東文磨 稲垣泰一校注・訳『新編日本古典文学全集38 今昔物語集④』(小学館 二〇〇二年)
- ⑧ 本稿における『無名草子』の本文は、樋口芳麻呂 久保木哲夫校注・訳『新編日本古典文学全集40 松浦宮物語 無名草子』(小学館 一九九九年)より引用した。
- ⑨ 田中登ほか編『寝覚物語欠巻部資料集成』(風間書房 二〇〇二年)
- ⑩ 大槻福子「『夜の寝覚』末尾欠巻部分の構造——新旧資料の解釈の再検討——」(『夜の寝覚』の構造と方法)笠間書院 二〇一一年)【初出】『国語と国文学』八二巻七号 二〇〇五年七月)
- ⑪ 連れ子説については注⑤の常盤井氏論文六頁、養女説については注②の辛島氏論文三一九頁にて論じられている。
- ⑫ 注②の辛島氏論文。
- ⑬ 注④の大倉氏論文。
- ⑭ 「うとまし」が多用されていることについては、注④の大倉氏論文で触れられている。
- ⑮ 「ものむつかし」は、大將が自らと婚姻関係にある宰相姫君に、訪れのなさを弁解する際に「ものむつかしき事どもに紛れて」(二六七頁)として見られる。この「ものむつかしき事ども」は、暗に内大臣の上による「そらじに」やそれに伴う女君の失踪といった、内大臣の上の行動全般を指していると考えられる。